

線香花火の思い出

高崎 斐子

現在お子様方の夏の夜のお楽しみと言えば、どんな物がお有りなのでしょう。TVの連続物か？ その他色々お有りと思いますが、さて、私には見当が付きません。私の子どもの頃、それは明治三十年代の事ですが、夏の夜、家での楽しみはまず花火。花火にも種々有った様でしたが、子ども達には線香花火が一番安全だということでした。私達はセンコウ花火と言わないで、センコ花火と詰めて呼んでいました。

当時神田小川町通りを南に一寸曲って行った所に、五十稲荷（ゴトウイナリ）というのが有りました。今でも有る

様です。この稲荷様の御縁日は毎月ゴとトウの字の付く日になっていました。私と弟は其日になると「今晚は五十様ヨ、連れて行って」とおねだりをしたものです。時には父や母が団扇など手にしながら涼みがてら連れて行ってくれましたが、他は女中について行って貰いました。

家は駿河台（現在日大の有る辺り）でしたので、夜ともなれば、ひとときわ淋しく人通りも稀れで所どころにガス燈がボンヤリ灯っていて薄暗く、女の一人歩きは危いと言われていました。行き交う人の顔もはっきりせず、何とも私は怖くて怖くて、大人の袖先きをしっかりとつかんで内心ビ



クビクしながら歩いてきた事を思い出します。

暫くして小川町の灯が見え初めに明るく人通りも繁く
なると、ホットしました。ずらりと並んだ夜店には金魚屋
あり、ほおずき屋有り、ほおずき屋には赤い丹波ほおず
きも並んでいました。虫屋はうす暗い場所に陣どつていま
した。螢は青い光を放ち、松虫鈴虫ガチャガチャなど賑や
かに鳴いていました。カブト虫はいなかったと思います。
その他耳栓で聞かせる蓄音機屋などもありましたが、私達
の足は花火屋の前で止ります。

長いのと短い線香花火を買います。花火屋は新聞紙で貼
った袋に入れ「ヘイ花火」といって渡してくれます。煙硝
(先のふくらんだ所に入っている黒い粉を私達は煙硝と呼
んでいました)の入っている方にかすかな重味を感じなが
ら、しっかりと手に持ち、帰りは怖さも忘れイソイソと家
に着きます。

さてそれからがお楽しみクライマックス。ランプを隣
室に遠ざけ、用心のため水を入れた小桶を調とよえてから、岐
卓提灯のついている縁先きに父や祖母の使っている煙草盆の
火入れを借りてきて、その炭火でつけるのです。手に持つ
方が細くて先の方が太いのでフラついて中々火が付かない

時もありました。

火が付き始めるとジュウ、ジュウといつて煙硝の匂いが
し始め、火の玉が出来始めます。玉が大きくなり始めると
大急ぎで手を縁の外へ伸ばします。やがて火玉からシャ
ッ、シャッ、シャッシャといいながらあの美しい火花が四
方へ飛び散ります。長い方の火花は長いだけのことはあつ
て火花も一段と大きく、摘んでいる指先きに多少の反応を
感じながらあかずそれを眺めるのです。そのうち火花もだ
んたん衰えはじめ、終りにはスイスイと細い火が流れ始め
ます。私達は「もう薄の葉になった」といって手を放し、
土の上に落すのでした。

中には火が付いてもそのまま火玉が育たずジュッとといつ
て灰の上に玉が落ちてしまうものもありました。皆はそれを
落第玉だなーと言って笑いました。そのうちに今晩はこれ
でおしまいという大人の声で心残りながら明夜を楽しみに
寝につくのでした。俗に「線香花火の様だ」とすぐ消える
ことを申す様ですが、どうしてどうして八十五歳の今日に
なっても、子どもの頃のあの線香花火は私の心の中に消え
るものではありません。今改めて感じました次第です。